走り読み文学探訪リバイバル(その15)

「走れメロス」　著者　太宰治

新潮文庫(255p,360円)　紹介者:榎本博康

[紹介]

メロスは村の牧人であり、羊と遊んで暮らしていた。しかし、悪に対しては人一倍敏感であり、邪知暴虐の王、ディオニスを除かなければならないと決意した。単純な彼は、のそのそと王宮に入ってつかまった。磔になる彼は、妹の結婚式のために、３日間の猶予を乞い、親友の石工、セリヌンティウスを人質とする。

メロスは村に帰ってから、繰上日程で結婚式を執り行い、宴半ばで寝る。目覚めたのは、市に戻るべき３日目の薄明であった。彼は雨で増水した川や、王が差し向けたと思われる山賊達と戦い、最後の力を振り絞って、日の沈み行くシラクスの市の刑場に駆け込む。

メロスの正義心と友情に感動した暴君は二人を許す。

[感想]

正義や友情が主題の短編であり、中学二年の教科書に採用されている。文体は格調高く、朗読にも適する。

太宰治は1948年に玉川上水で投身自殺を遂げた。この日は桜桃忌と名付けられ、現在でも熱烈な太宰ファンが集まる。この1998年6月は丁度50年にあたるので、盛大であったろう。彼の作品の内、世間に最も影響を及ぼしたのは「斜陽」ではないか。敗戦、没落する貴族の娘を主人公として、一九四七年に書かれた。戦後ニヒリズムを代表し、「斜陽族」という新語さえ産んだ。しかし、やがて高度成長期に入り、「しゃようぞく」と言えば、会社の金で飲み食いしかつ遊ぶ、「社用族」のこととなった。

余談だが、青森県の津軽半島、五所川原の北の金木(かなき)が太宰治の生地であり、明治時代の建築である広壮な邸宅は、今は「斜陽館」として旅館兼土産物屋になっている。以前、1988年に訪れたことがあるが、その広壮な造りから、相当の名家であったことが伺える。

さて本題に。まずメロスの走りをランニングとして解釈してみよう。片道十里とある。これが今日の尺度でどの程度かは述べられていないが、メロスは作中で村からあらかじめ一往復を歩いている。通常、人間が一日に歩く距離は最長40キロメートル程度である。またその時間的な記述からフルマラソン程度と考えて良さそうだ。

さて、季節は初夏。朝の薄明の中を再度市へ向かう。まずシラクスの場所であるが、現在のイタリア南部に位置するシチリア島南東部の港湾都市、シラクサと思われる。広辞苑によれば紀元前八世紀に建設されたギリシャの都市国家で、前五世紀に繁栄をきわめたが、前212年にローマに降伏したという。交通の要所であり、新約聖書の使徒行伝ではパウロがエルサレムで捕えられてローマに船で送られるとき、ここに寄港している。この市は北緯37度位であり、日本で言えば富山市並の緯度だ。理科年表によれば富山の5月1日は、日の出が4時58分、日の入

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

りが18時39分である。これで行こう。日照時間が14時間近くもある。楽勝だ。

出発は朝の薄明だから、日の出直後の午前5時としよう。まずメロスは気持ちを振り切るために、走って村を出た。隣の村までは約10キロメートル。雨も止み、日が高く昇ってそろそろ暑くなってきたとあるが、どうも計算が合わない。この記述では8時過ぎか9時だが、10キロメートルに3時間以上もかかるだろうか。

前提を改めよう。朝はまだ雨が降っていて暗かったのだ。そうしよう。薄明のスタートは7時と訂正し、10キロメートル地点は八時半としよう。　ゆっくりで間に合うと判断し、次の10キロメートル程はぶらぶらと歩き、マラソンの距離の中間点に至る。午前11時だ。所が、川が昨日の豪雨で濁流となり、橋を流してしまった。散々に躊躇して、ついに泳ぎ渡ることを決意する。対岸に着いた頃は既に日が西に傾きかけている。たっぷり躊躇したとして、午後3時か。

所が、今度は3人の山賊が妨害する。どうも王の回し者らしい。これをたちまちに殴り倒して峠を駆け下りるが、灼熱の太陽に照らされ、疲れ切って動けなくなり、やるだけはやったんだと、心の葛藤に悩みながら寝てしまう。35キロの壁だ。午後5時。

目が醒める。夕日に木々は赤く輝いている。午後6時過ぎだ。メロスは残り7キロを最後の力を振り絞って走った。日が地平線に没し、残光が消えようとする瞬間に、刑場に駆け込んだ。午後6時39分、制限時間丁度。記録、フルマラソンを11時間39分。無理に解釈すればこうなる。でもずいぶん無理な解釈だったが、まあ初マラソンは思い通りにはいかないものさ、ということにしておこう。

このメロスの気分は、私は秋田内陸百キロでいつも味わっている。このレースは、角館市から山間部を真っ直ぐに北上して鷹巣町にゴールする、一本道の難コースだ。例えばサロマ湖百キロは６月末の開催で日照が長いが、秋田は９月末なので日没が早いのだ。最後はつるべ落としの秋の日との競走であり、何回か出場したが、一回しか明るい内にゴールできなかった。制限時間には間に合っているのだが、やはり明るい内というのが人間の心理である。気が急いてくるのだ。鷹巣町の手前の丘を下っていくうちに、どんどんと暗くなってくる。この場面が走れメロスであれば、私はセリヌンティウスを何回も見殺しにしたことになる。

王は友情に感動し、彼を許した。本当だろうか。そんな暴君はあり得ない。王が派遣した山賊役の家来が、なぜ弱かったかを考えてみよう。三人もいたのに、たちまち殴り倒されてしまったのだ。王の命令が、メロスを阻止することであったら、やり損なった場合の罰は、王の権威を大いに傷つけることになるので、死罪相当であり、家来は必死のはずだ。あっけない程に弱かったわけは、暴力的に妨害するのが目的ではなかったのだ。真の目的はメロスに言い訳を与えるためだ。妨害が入ったが、最善を尽くして闘った。だから遅れても仕方の無いことだったと。事実メロスは疲れて心が弱くなり、一時は王の目論見通りになりかけた。ディオニスは人間の偽善を暴き、友情など聞こえのいい心の脆さを暴くことに長けているのだ。でもぎりぎりでメロスは自分を取り戻した。

今回は負けたが、この心理戦、これからも王は楽しむだろう。王は既に次の策を考えているのではないか。メロスが自らの行為で友情をズタズタにし、かつては友情を誓い合った者同士が血みどろの殺し合いをするような策を。そのために今回は許したのだ。

ここでメロスを処刑すれば、それは単にいつものように人の命をもてあそんだだけの暴君の所業に過ぎない。ディオニスは既に悪名高いのだから、今更評価が下がる怖れはない。しかし許した上で、メロスがうまく罠にはまれば、これはディオニスの人を信用しない価値観を補強する格好の事例となり、王を大いに満足させることとなろう。このニヒリズムこそが本書の主

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

題ではないか。私は王の次の策を、わくわくしながら想像する。

（初稿1998.5.25）

［リバイバル感想］

ランニングから見たこの小説のテーマは「ためらいの走り」だ。走らないといけないのに、ゴールが近くなるほど足が動かない。そしてもう無理だろうという地点から全力疾走し、自分は約束を守るために全力で頑張った。でもダメだった。あの邪魔さえ入らなければ、との保身の走りを太宰はさせた。

そこでさすがのディオス王、本当は僅差でアウトなのに、わざとセーフの判定をしたと想像してしまう。次の仕掛けのためにだ。

でも、とんでも無いことを書いてしまったと反省もしている。要するに走れメロスの続編を提案してしまったことだ。どなたか書いて欲しいし、コンテストでもいい。

私は暴君ディオニスのファンだ。人の心を信じられないのは、当然だ。王ともなれば、周囲には王を利用しようとしている連中ばかりであり、相互に足を引っ張りあい、王の耳元でフェイクニュースをささやき、ひそかに謀反の刃を研いでいるのだろう。であれば、王はその彼らを手玉に取り、えさを与えて操り、毒を与えて退け、競争させて疲弊させ、信用させて本音を引き出す。些細なことで排除し、常に課題を与えて本質を考える余裕を与えない。浪費させて武装させず、わずかな褒章でおだてあげ、突き落として自暴自棄にする。

しかし王は必ずしもそれを楽しんでいるのではないだろう。信頼や友情に、実はあこがれているのかもしれない。ひょっとしてそれは庶民の中にあるのかもしれない、それが王の洞察である。メロスは友人を見殺しにしかけた。だがセリヌンティウスは違うかもしれない。至誠の人なのか、それとも単に大馬鹿なのか、

王の次の仕掛けはセリヌンティウスに対してだろう。ではどうするのか。私もだんだんと暴君の気持ちになってきた。

（2020.6.25）

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.